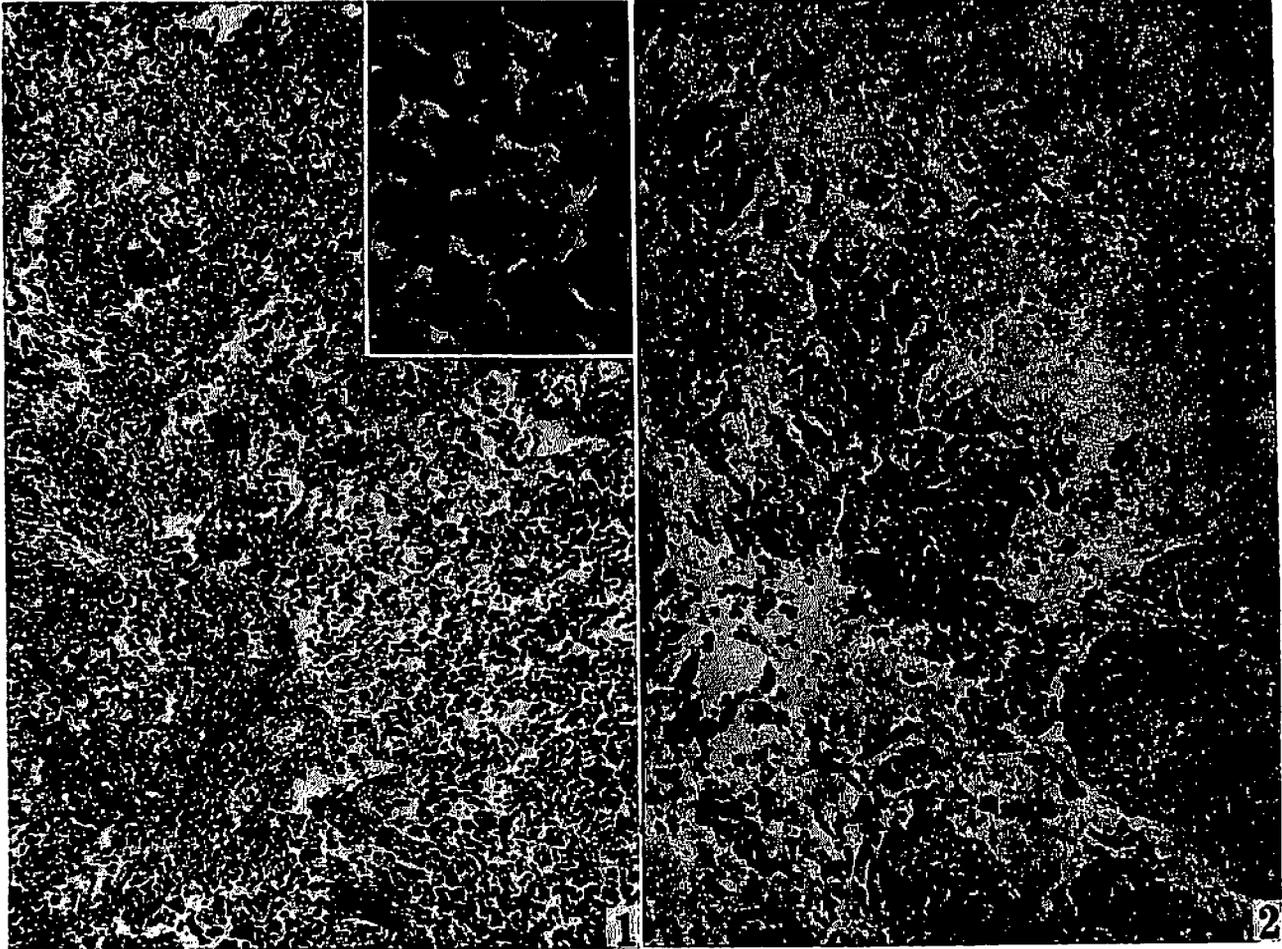


猫の肥胖細胞腫

東京大学家畜病理学教室 第8回獣医病理学研修会 標本 No. 112



肥胖細胞腫は犬の皮膚に好発する腫瘍の一つとして、その原因、組織学的所見などに特別の興味もたれているが、猫では発生部位が犬と異なり、脾に原発するものが多い。当教室では過去7年間に生検・剖検合せて7例の猫の肥胖細胞腫を経験したが、リンパ節の1例を除いて他はすべて脾臓原発と考えられる症例であつた。

提出標本はその中の1例(♀, 8才)で、1964年11月に巨脾を摘出し、組織学的検査により metachromasia 陽性顆粒をもつ細胞を証明し肥胖細胞腫と診断したが、術後約3年経た67年8月に斃死、剖検の機会に恵まれた。

剖検所見では肝の腫大と硬さの増加が認められた他は各臓器に特に著変はみられなかつたが、肝、骨髓、肺、心血の塗抹 Giemsa 染色標本において腫瘍性の肥胖細胞が多数認められた。

組織学的所見—脾：腫瘍性肥胖細胞の増殖が旺盛でリンパ濾胞は圧迫されて縮小または完全に消失している。脾柱周辺や残存するリンパ濾胞周囲には形質細胞の小集簇がみられ、そこにはまれに Russell 小体を多数含む形質細胞 (Grape cell) が認められた。また中心動脈壁の肥厚と軽度の類線維索変性もみられた。犬の本腫瘍では腫瘍組織中の好酸球のびまん性浸潤が特徴病変の一つと

してあげられているが、猫では好酸球は目立たない。

肝：門脈枝の血管内に腫瘍細胞の増殖がみられ、実質には腫瘍細胞の結節状増殖が多数認められる他、Glisson 氏鞘附近にはリンパ球の集簇が諸所にみとめられる。

腫瘍性肥胖細胞：一般に円形、楕円形で、周囲の組織の状況により紡錘形～多角形など多形性を示すが、巨細胞化することはまれである。核は一般に淡明、円形の大型で、明瞭な核仁を有するものが多く、核分割像も頻繁に認められる。細胞質は豊富で、H-E 染色では一般に淡紅色無構造に染まるが、metachromasia 染色を施すと均一な陽性顆粒が充満しており、他の腫瘍との鑑別は容易である (新鮮材料ならばその塗抹の Giemsa 染色により診断は可能)。またこの顆粒についての種々の組織化学的検査の結果、ヘパリンおよびヒスタミンの存在が推定され、RNA の存在が確認された。

写真1は脾、H-E、100X、左上部に不明瞭ながらリンパ濾胞が存在するが大部分は腫瘍細胞によつて占められている。右上の拡大写真は Toluidine-blue による metachromasia 陽性を示す (400X)。写真2は肝、Toluidine-blue 染色、100X、腫瘍細胞は metachromasia 陽性で他の細胞と容易に見分けられる。